

## 【報告】

国際ワークショップ「トランスカルチャー状況下における顔・身体」

共催：科学研究費（新学術領域）「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」（代表者：床呂郁哉、課題番号：17H06341）、基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関2」

日時：2018年3月3日

場所：Swiss-Belresort Watu Jimbar, インドネシア、バリ島

### プログラム

10:00-10:15 吉田ゆか子

開会の辞

10:15-11:05 吉田ゆか子+イ・クトゥット・コディ

「仮面と踊る—演者イ・クトゥット・コディ氏を迎えて」

11:05-11:55 ユスティナ・デヴィ・アルディアニ

「サヒタのパフォーマンス—風刺劇の舞台における女性たちのボディランゲージ」

11:55-12:15 休憩

12:15-13:15 バリ舞踊ワークショップ

13:15-14:20 昼食

14:20-15:10 高橋康介

「フィールド実験チュートリアル」

15:10-16:00 吉田優貴

「一緒に躍るという経験—ケニアの聾の子供を事例に」

16:00-16:20 休憩

16:20-17:00 菊竹智之

「ある知的障害者とのダンスにおける顔の働き—うまくいかない関係の豊かさ」

17:00-17:40 赤阪辰太郎

「〈顔〉と〈わたし〉の現象学—鷺田清一の仕事を紹介する」

17:40-18:30 ディスカッション

参加者：26名

### 内容：

本ワークショップは、顔と身体表現に関する国際比較という科学研究費プロジェクトの趣旨に基づき、インドネシア・バリ島にて実施した。現地の舞踊家や舞踊研究者と日本から人類学者・心理学者（実験系）・哲学者が登壇し、それぞれの見地から顔や身体表現について具体的に論じた。また、現地の男性舞踊家および女性舞踊家をお招きし、実際にバリ舞踊の「男踊り」および「女踊り」それぞれにおける基本的な動きを参

加者全員で習う舞踊ワークショップの時間を設けた。バリ舞踊特有の顔および身体表現を実践することを通して、バリの舞踊家たちの顔（表情）のつくりかたや身体の動きを実地で行うだけでなく、現地舞踊家による言葉での説明と参加者自らの顔や体の動きとをいかに結びつけてゆくかについての深い洞察を得た。

研究発表の内容については、登壇順に以下に記したい。

(1) 吉田ゆか子+イ・クトゥット・コディ (AA 研/ インドネシア芸術大学デンパサール校)「仮面と踊る—演者イ・クトゥット・コディ氏を迎えて」

イ・クトゥット・コディ氏は、バリ島の仮面舞踊劇トペンの演者として活躍するほか、仮面職人、影絵師、芸術大学の講師といった多様な立場でバリ島の芸術文化を牽引している。本発表では、バリの仮面芸能について概観した上で、吉田がコディ氏に質問するという形で、トペン上演に込められた哲学的な含意や、これまでの仮面づくりおよびトペン上演の経験について語ってもらった。上演中の仮面に「命を与える」ためには、仮面の制作中から、上演後の舞台裏まで、様々な儀礼がほどこされ、また演者は様々な身体的なテクニックを用いる。特にトペン上演中の声や身体の使い方については、身振りを交えながら具体的にその詳細が語られた。

(2) ユスティナ・デウィ・アルディアニ (インドネシア・ジョグジャカルタ・サナタ・ダルマ大学)「サヒタのパフォーマンス—風刺劇の舞台における女性たちのボディランゲージ」

インドネシアのソロにおいては、王宮の伝統、イスラム教、及びメディアが多様な形で女性の理想的な身体の在り方を規定している。例えば、王宮で踊ることを許される女性の踊り子は、若くて美しく、肌がきれい、整った体形の者とされている。こうしたことを背景に、本発表では、パフォーマンス・グループ「サヒタ」の作品をとりあげる。サヒタは、いわゆる理想的な女性像からは外れるような身体をもつ中年女性たちで構成される。彼女たちによる、王宮舞踊をパロディした作品では、かわいらしい女性というステレオタイプをユーモラスなやり方で批判する。本発表では、社会における理想的な女性像が、非言語的なコミュニケーションである風刺劇の表現を通じて交渉されてゆく過程や、その可能性を考察した。

(3) 高橋康介 (中京大学)

我々の研究グループではこれまでヨーロッパ、東南アジア、アフリカ諸地域など、世界各地のフィールドで実験心理学をベースにした実証的研究を行ってきた。ワークショップにおいて、領域メンバー内での学際連携の推進（とくに文化人類学と実験心理学の融合）を目的にフィールド実験チュートリアルを実施した。まず、これまで研究を進める中で見えてきたフィールド実験に特有の事情、問題点、考慮すべき点などを領域メンバーと共有した。その上で、タブレットを用いた実験チュートリアルとして、顔表情判断タスクについて、フィールドでの実験参加者リクルートから実験の説明、参加同意の取得、そして実験の実施に至るまで、一連のフィールド実験の実践を実演し、フィールド実験の実践方法を領域メンバーと共有した。

(4) 吉田優貴 (AA 研)「一緒に躍るといふ経験—ケニアの聾の子供を事例に」

ケニアの聾学校を拠点にフィールドワークを行っていたとき、しばしば子供たちが踊る／躍る姿を目にした。しかし、その踊り／躍りのさまを詳細に分析してみると、大きな相違点が見出された。一つは競技会で審査員や観衆の前の舞台上で披露するために訓練を積み重ねた「踊り」、いま一つは誰からともなく場当たりに体を動かしダンスをする「躍り」である。他方、前者の踊りを、時空間離れたところで「再現」した聾の子供の例があった。これについて体の動きの同調現象に着目し詳細に分析したところ、時空間が離れているにも拘らず動きのタイミングもほぼ一致した。これら「一緒に」踊る／躍る例を通して、身体が「一緒に」あるということをもどのように考えるべきか、特に時間・空間という単位で区切ってそれを捉えようとするこゝとに対し問題提起を行った。

(5) 菊竹智之（大阪大学）「ある知的障害者とのダンスにおける顔の働き—うまくいかない関係の豊かさ」

本発表は、健常者と障害のある人とが共に行うダンスの活動について、「顔」の働きに注目して行った一考察である。他者の顔は注視することの難しいものだという点を鷺田清一は述べているが、このダンスの活動においては一対一で向かい合い、見つめあって踊る場面がよく見られる。なぜこのダンスの場では他者のことを見つめることができるのか、という疑問を切り口に「健常者」と「障害者」の関係にダンスがどう作用するのか考えた。具体的な場面から考察を行うために、本発表では「エピソード記述」という手法を用いた。

鷺田清一は私たちの「顔」が、互いに表情や仕草を鏡のように照応しあうことによって成り立つ現象だと考えた。他方、(インペアメント等の)大きく異なる身体的特徴を持つ者どうしの間では、この鏡のような関係がうまく働かない。エピソードでは、鏡の関係がうまく働かないときに、相手の顔面が「もの」的に現れ、観察可能になることが示される。これはある種の出会い損ないでもあるが、身体を持つ可能性の開拓を重視する種類のダンスの文脈の中では新しい表現の種ともなる。ここから「障害者」と「健常者」の間にしばしば起こってしまう出会い損ないを作り変える手法としての表現を考えることができるだろう。

(6) 赤阪辰太郎（大阪大学）「〈顔〉と〈わたし〉の現象学—鷺田清一の仕事を紹介する」

本発表の目的は、日本の哲学者・鷺田清一の哲学を〈顔〉と〈わたし〉という観点から概観することで、多様化する顔・身体現象に基礎的な洞察を与えることにある。そのため、『顔の現象学』およびその周辺テクストを讀解し、そこにみられる全体的な構図を解明した。

①西洋近代社会を根底から規定する *disponibilité* と *propriété* 概念の縫合を解きほぐすことで、つねに同一性を保つ個人と、それを表示する記号としての顔、という体制を突き崩し(〈素顔〉の解体)、②それを足がかりに、顔現象の多様性と可塑性に目を向けつつ、それらを貫くものとして、〈可視的存在の変換現象〉として顔を再定義した。③さらに、自己の顔面が所有不可能であるという事実を指摘することから、他者によって鏡のように照らし出される顔に〈わたし〉の成立にとって本質的な契機を見出し、〈他者の他者〉としての主体性を提示した。

以上の研究発表および舞踊実践を通して、顔や身体表現をめぐる比較文化的かつ領域横断的な視点での知

見を得るのみならず、参加者のほとんどが馴染みのない、顔や身体表現を体験的に学ぶことができた。

(文責：吉田優貴)

\*企画趣旨文・(1)～(3)、(5)～(6)の発表要旨を除く

当報告の内容は著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.